テーマカレッジ「都市と地域」

宮崎県五ケ瀬町のまちづくり

社会科学部１年　　染田　麻弓子

はじめに

私は宮崎県五ケ瀬町で、中学校・高等学校時代の六年間を過ごした。実家は宮崎県門川町なのだが、中学・高校が五ケ瀬にあり、また全寮制だったことから、門川町よりも五ケ瀬町にふるさととしての親しみを覚えるようになった。美しい山と川とあたたかい人々、とにかく自然しかない、そんな五ケ瀬町に私は心を奪われてしまった。そして市町村合併問題がもちあがり、地方自治への関心が高まっていた 2003 年当時、五ケ瀬町に住み、五ケ瀬町を学び、五ケ瀬町民として五ケ瀬のことを話し合ったシンポジウムを経て、私は学問分野としての「住民自治」に非常に興味を持った。そして今回、このような作品を作ることになり、私は自分の原点である五ケ瀬町について、自分の経験も交えながら、自分の考えを述べることにした。多少感情論になるところもあるかもしれないが、ご了承願いたい。

目次

まちづくり　～宮崎県五ケ瀬町～
（１）宮崎県五ケ瀬町　概要
（２）住民自治の必要性
（３）五ケ瀬のまちづくり
（４）　最後に

まちづくり　～宮崎県五ケ瀬町～

「まちづくり」「地方自治」「住民自治」という言葉を、私が初めて知ったのは高校三年生の春、シンポジウムの企画が持ち上がった時であった。それまでは興味が全くなかったせいか、言葉さえも聞いたことがなく「最近できた言葉？」と勝手に考え、更に、「そんな活動余り活発ではないだろう。こんな田舎では…」と思っていた。だが、実際に「住民自治・五ヶ瀬」をテーマにシンポジウムを開催することになり、その調査を進めるうちに、私の考えていたこととは大分かけ離れた現実が浮かび上がってきたのである。

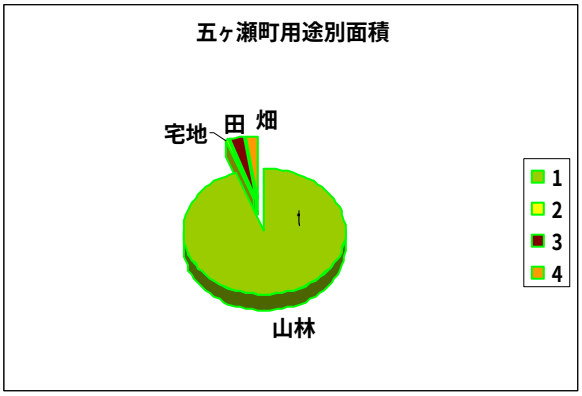
（１）宮崎県五ヶ瀬町

〔概要〕

宮崎県は、全国的にみても、九州でみても田舎である。都会か田舎か、というのは、特に人口密度をみてみると簡単にわかる。面積比にして東京は 2187 平方ｋｍ、宮崎県 7734 平方ｋｍと、東京：宮崎　1：3 だが、これが人口比となると東京約 1245 万人に対し宮崎県 116～117 万人、東京：宮崎　11：1 となる。つまり人口密度でいえば、東京：宮崎　33：

1 となるのである。こうしてみると、いかに東京に人が密集しているか、良く解るだろう。地方から東京に出てきた人が、まずは人の多さにびっくりする、というのもうなづける。

さて、宮崎県五ヶ瀬町は、面積およそ 172 平方ｋｍ、人口 5100 人の小さな町である。面積の９割弱である 151 平方ｋｍが山林で、見渡す限り山、山、山…の風景はまさに田舎。



標高が高いため、温暖で「南国」と称される宮崎県に属しているにも関わらず冬には積雪があり、日本最南端のスキー場さえあるほど寒い。例に漏れず、高齢化の波に乗り 65 歳以上の高齢者人口は全体の約 30 パーセントになる。後継者問題にも悩むこの町がどのようなまちづくりに取り組んでいるか、次に紹介していこう。

（２）住民自治の必要性

さて、まず一つはっきりさせておきたいのだが、五ケ瀬町のまちづくりは「住民自治」をベースに行政がサポートする形で行われている。この「住民自治」という言葉は、五ケ瀬町に限らず現在まちづくりに奮闘している全国の地域で重要なキーワードとなる言葉だ。

それでは、住民自治とは何か、何故重要なのか。

その理由は様々であるが、一つに財政面での理由が挙げられる。

現在、「平成の大合併」とよばれる合併ブーム、全国の各市町村は「合併」議論に白熱している。市町村合併は、小泉純一郎首相が推し進める三位一体改革（国庫補助金削減・地方交付税交付金の見直し・税源移譲を一体とした改革）に際する明らかな財源減少に対し、各自治体が自らの手による財源確保などで改革に耐え得るように規模を拡大しよう、無駄を無くして効率をあげよう、という考えのもとで行われている。つまりここで述べたいのは「地方自治体が使える金が減る」ということだ。一時は（2003 年２月）西臼杵三町（五ヶ瀬・高千穂・日之影）で任意合併協議会を設けたにも関わらず 2004 年 1 月 27 日には自立の道を歩むと発表した五ケ瀬だが、金がないのは間違いない。財政力指数（基準財政収入額／基準財政需要額）も、人口 5000 人規模の町村での標準が 0.2 とされるのに五ケ瀬町では 0.12 しかない。「地方自治」は、金がないため辛い状況に立たされている。そして、だからこそ今重要なのが「住民自治」なのだ。

なぜ、金がないと住民自治が重要となってくるのか。例えば歩道が雑草などにより歩けなくなっているとする。そこでどうするか、役場に届けて雑草の処理を頼むか。これを、住民でやるのである。声を掛け合って、回覧版をまわして、町内放送を利用して人を集め、みんなでやる。除草作業だけでなく、道路の舗装や公園の整備など、いままで役場任せにしてきたことを自分たちでやっていく。金がなく役場にできないなら、自分たちでやろう、自分たちで自分たちの町を住みよくしていこうというのが住民自治である。これにより自

治体の負担を減らせるだけでなく、住民自身に意識をもたせ、地域を活性化させていくことに繋がるのだ。ここに住民自治の意義がある。さらに住民の意思が解り易く、届きやすく、実行に移すのも早くなるため、初めは除草作業などの小さな事でも、続けて色々な事を住民同士でやっていくようになるだろう。最初にある程度行政（役場）からの後押しが必要だが、活動が波に乗ればそこは人口が少ない五ケ瀬町、あっという間に波及するに違いない。

（３）五ケ瀬町のまちづくり

現在五ケ瀬町は大きく三つの地域に分けられている。三ケ所地区、鞍岡地区、桑野内地区である。もとは三ケ所と桑野内で「三ケ所村」、鞍岡地区は「鞍岡村」と称しており、昭和３１年（ちょうど昭和の大合併の時期である）に両村が合併して現在の「五ケ瀬町」となった。五ケ瀬町には前の時代から続く、館長や組長といった自治制度が残っており、まちづくりは行政を巻き込みながら、主にその単位で行われる。また、商工会単位やほか様様な団体・委員会がそれぞれ多種多様な活動を行っている。それらを具体的に示していこう。

《活動団体・主な活動内容》

- 夕日の里づくり推進会議　…グリーンツーリズム事業、夕日の里づくり
- 雪の五ケ瀬　村おこしグループ　…郷土芸能伝承活動、雪だるま生産販売
- 五ケ瀬町　しゃくなげグループ　…特産品開発、販売（ばぁちゃんの店）
- 新ひむか五ケ瀬の里づくり町民会議…花いっぱい運動、美化活動、郷土芸能保全
- 村づくり雪だるま共和国　…霧立越歩道草刈、星空観測会などの実施
- 若桜会　…夜神楽の際の相撲大会など運営
- 荒踊りの館管理運営委員会　…五ヶ瀬町の文化財「荒踊り」中心に町づくり
- 室野地区むらおこし実行委員会　…室野地区のまちおこしグループ
- 鞍岡地区むらおこし実行委員会　…鞍岡地区のまちおこしグループ
- 暖地営農村づくり協議会　…農村中心、coop と協力し特産物流通させる
- １２区お宝保存会　…地域の宝を発見、磨いていく
- 五ヶ瀬町地域づくりネットワーク協議会
  …まちづくり団体の活動の総括、ネットワーク

今回はこの中でも特に活発な活動を行っている、夕日の里づくり推進会議について見てみよう。

【夕日の里づくり推進会議】

設立：平成 8 年 4 月

設立主体：自主的組織

運営主体：自主的組織

団体構成：100 名（男 70 名　女 30 名）

活動実例：夕日の里ふるさと体験交流ツアー
夕日の里フェスタ in 五ヶ瀬
夕日の里ふれあい彫刻シンポジウム
ふくおか町人会との交流
特産品郷土料理研究開発

活動実例中の夕日の里ふるさと体験交流ツアーとは、簡単に言えばグリーンツーリズムの 1 つである。毎年行っており、定員およそ 80 人であるのに対し毎回 2・300 人程の予約があるらしく、人気だという。民泊を基本とし、ペンションではなく農家やセンターなどに分けて泊り、地元の方と農作業をしたり、川で遊んだりやまめを焼いて食べたりなど様々な体験をする。リピーターも多く、新規とあわせて参加希望者は年々増えている傾向にあるという。時期は今の時点では夏のみとなっているが、これからはもっと季節折々のものを活かして行きたいと思案中らしい。「最終的にはいつでも農泊できる状態にしたい。五ヶ瀬には、夕日はもちろん春は枝垂桜に田植えや茶摘、夏には蛍や川、秋には稲刈りや紅葉、冬にはスキー、夜神楽など見所がたくさんある。いつきても気軽に泊めてもらって、一緒に花見にいったり夜神楽にいったり、などそうゆうことがしたい。だからグリーンツーリズムは途中で止めるかもしれない。」と推進会議メンバーの佐藤氏は述べる。

夕日の里フェスタ in 五ヶ瀬

ふるさと体験交流ツアー

また夕日の里フェスタ in 五ヶ瀬では、北海道から姉妹都市提携を結んでいる町の町長を呼んだり、地元の和太鼓チームの演奏や神楽を披露したり、音楽家や演歌歌手などを呼んだり、地元の特産品や郷土料理の販売、紹介をしたりしている。「カッポ酒」と呼ばれる温かい振舞い酒を、沈む夕日と響く太鼓の鼓動の中で飲むのは、もう肌寒くなってきた夕日の里での最高の贅沢かもしれない。しかもその酒を入れるコップはなんと竹を切ったものである。最近切られたものなのだろう、まだ香りが強く酒の立ち上る湯気に竹のにおいが交わり一段と風味が強くなる。「これを一度味わったら来年も来たくなるじゃろ」と誇らしげに話す役員。普段は農業を営んでいるという。「一昨日切って昨日やーっと洗ったばっかじゃが。結構大変やとぞ。でん、これを毎年楽しみにしちょる、っつう人もおるとよね、やっぱねぇ。それでよ、今年からこの竹のコップをね、一個 50 円で売ることにしたっちゃ

わ。今まではサービスやったっちゃけどね…売れるか知らんと思っちょったらこれが意外に売れるとよね。まあ、常連さんからはちょっとばかしブーブー言われたけど 50 円やから何だかんだいってみんな買ってくれたわ」　夕日の里づくり推進会議が、徐々にその規模を大きくしながら発展してきたのは、このように毎年同じものを行うのではなく、常に試行錯誤し工夫してきたからだろう。地域の者にとってはそんなに珍しくもないものが、お金になる、需要があると気づくのは、実は難しいことなのだが、「ふくおか五ケ瀬町人会」（後述）などの「外」との交流などによって「地域の宝」を発見するようになってきたのだ。そしてそれを活かして活動している。イベントの資金は、現在住民の寄付や自治体、地元の事業所からの協力金で賄っているが、そのうち寄付だけでも運営していける団体になるだろう。

浄専寺の枝垂桜

白滝の紅葉

神楽の奉納

また、これらイベントの情報などは、ふくおか五ケ瀬町人会のメンバーと協力して発信しているそうだ。西日本新聞に掲載してもらったり、福岡の有名なケーキ屋のチェーン店（福岡県内に 27 店舗ある）にポスターを貼ってもらったり（何故ケーキ屋かというと、五ヶ瀬の卵でできた五ヶ瀬プリン、五ヶ瀬カスタードケーキも同時に宣伝しているから）して人を集めているという。ターゲットを福岡にしたのは、やはり九州では最も都会であり人口が多いということと、交通の面でも、高速を利用すれば福岡－五ヶ瀬間は片道２時間半で行き来できるという利点があるからだろう。更にふくおか五ケ瀬町人会と協力して、福岡で五ヶ瀬の物産展を開かせてもらったり、夜神楽を舞ったりして五ヶ瀬をアピールしている。夕日の里づくりは、情報の発信にも力を入れているといえよう。

しかし、主に夕日の里づくり推進会議は桑野内地区で活動している。「桑野内や五ヶ瀬に限定せず、広がりを持ってやっていきたい。日本中『宮崎の五ヶ瀬』で通じるような町にしていきたい。」と役員の佐藤氏は語るが、現状のところ桑野内地区だけで盛り上がっている感は否めないという。そもそも五ケ瀬町は、前述のとおり昭和 31 年の三ケ所村と鞍岡村の合併によってできた、まだ「五ケ瀬」としては歴史の浅い町であり、人の居住する集落と集落の間は山で隔たれ、距離もある。そのためもあってか、50 代から上の世代では、「五ケ瀬」というより「桑野内」や「鞍岡」といった地区にこだわる町民も多い。夕日の里づくり推進会議は大分県でグリーンツーリズム事業をしている町とも交流しているというが、まずは五ヶ瀬町内での団結、協力だ。これからの課題である。

先ほどから度々登場する、五ヶ瀬の情報発信に力を入れる「ふくおか五ヶ瀬町人会」に

ついて詳しく述べよう。

【ふくおか五ヶ瀬町人会】
福岡で活動するいわば五ヶ瀬町ファンクラブ。
五ヶ瀬町の情報発信などに積極的に協力。
設立：2000 年
団体構成：約 150 名
活動実例：福岡での五ヶ瀬特産品の販売会実施
　　イベント情報の発信・イベント参加

　普通、このような町人会という団体は、その地域出身者が集まるものだが、このふくおか五ヶ瀬町人会は、なんとほとんどが福岡で生まれ育った方たちによって構成されている。会長を務めている井村氏によれば、なかには一度も五ヶ瀬にきたことのない人さえいるという。そう述べる井村さん自身、出身は福岡である。五ヶ瀬町との付き合いのきっかけを伺うと、「ふるさと体験交流ツアーに参加してから。以前から山登りが好きで五ヶ瀬近辺に来たことはあった。」という答えが返ってきた。夕日の里推進会議の活動は、着実に広がりをみせているようだ。さらに、五ヶ瀬町役場の企画商工課に伺った話では、この町人会発足のきっかけは、夕日の里フェスタ参加者リピーターから、「なにか五ヶ瀬に恩返しがしたい」との声が出始めたことによるという。そこから組織拡大のために、五ヶ瀬に登山に来た人、夕日の里フェスタ参加者、ふるさと体験交流ツアー参加者などありとあらゆる人にダイレクトに情報を送り、今のような組織をつくりあげたのだ。町人会の構成員が五ケ瀬町出身者中心でないのはこのような設立のきっかけによるのだろう。そして、現在も月に１・２回五ヶ瀬を訪れ、将来は五ヶ瀬に移り住みたいと話す井村氏は、本当に五ヶ瀬が好きなのだなと感じさせた。
　ふくおか五ヶ瀬町人会の存在によって、五ヶ瀬町は情報発信という点において大きな利点があるが、それだけではない。
　田舎地域のまちづくりにおいて、こんなことがあるらしい。
「よく、地域のいいところをみつけて伸ばしていくというが、こんな田舎にいいとこもなんもありゃせん。」
「自慢できるもんもなんもない。しかたないわ。」
という、諦め、もしくは自分の地域に自信がもてない、ということだ。特に五ヶ瀬町は、高千穂町という宮崎県西臼杵ではもっとも大きな町に隣接しており、昔から「出身は」と聞かれても「五ヶ瀬」とは言わず「高千穂」と答えていた、という住民さえいる。こんな意識では、まちづくりなど到底できるものではない。住民自ら、自分のまちのアイデンティティを否定していたのだ。
　しかし、ふくおか五ヶ瀬町人会が発足し、町の出身者でもない、いやむしろ都会の人が、

自分たちの町を応援してくれ、さらに大好きだといってくれる。「なんもありゃせんけど」といえば「とんでもない最高だ」と返ってくる。ふくおか町人会は、五ヶ瀬町民の町民としての自信を回復させるばかりか、「こんなものが実は素晴らしいのか」と「地域の宝」を町民に自覚させる働きもしているのだ。まちづくり・住民自治において、自分の町に自信をもつこと、町のアイデンティティを自覚することはとても重要なことだ。ふくおか五ヶ瀬町人会なくては、五ヶ瀬のまちづくりの活動はここまで拡大しなかっただろう。それどころか、簡単に高千穂との合併に合意し、「五ケ瀬」は消えていたかもしれない。

【五ヶ瀬町地域づくりネットワーク協議会】

そして、肝心なのは「五ヶ瀬町地域づくりネットワーク協議会」という、多数ある地域づくり・まちづくりの団体を繋ぐ団体である。これは「全国地域づくりネットワーク協議会」「宮崎県地域づくりネットワーク協議会」とつながるネットワークのひとつだが、行われているまちづくりの活動を総括する団体は必要、かつ重要である。

五ケ瀬におけるまちづくりの活動は、最終的に住民自らが行う住民自治の形が理想である。しかし、行政任せ、役場任せが染み付いた現状では、理想到達までは厳しい状態である。もし、個人がまちづくり・まちおこしの活動を始めようと思っても、どこから何をすればいいのか考えつかないだろうし、実行に移すのも難しい。さらに実行できたとしても、その活動が単発で終わってしまう可能性は高い。しかし、そこにまちづくりのことを総括する団体があれば、個人単位でもそこに問い合わせ、自分のしたい活動を行っている団体を紹介してもらったり、同じ目標を持った人を集めて新しい団体をつくったりと、活動にスムーズに参加できる。また、団体に所属することで活動は継続するだろう。さらに、総括する団体は各団体のイベント日時を調整したり、活動内容を把握したりすることで、内容の重複や無駄を抑えることもできる。

五ケ瀬町の場合、この「地域づくりネットワーク協議会」が全国・宮崎県のネットワークの一部である為、全国・宮崎県規模でもネットワークが可能だ。現在は行政、県庁がこのネットワークの主体であり、年に何回か総会や研修を行ったりするような会で、そこまで強力なネットワークではないようだが、うまく活用すれば、他市町村との連携でさらに広範囲で面白いまちづくりができるだろう。宮崎県としての五ケ瀬町のまちづくりという視線も入り、違った展開も期待できる。また協議会自身、現状の行政主体団体から、住民の自主的組織へと移行してやっていけるようになればなおよいだろう。今後の五ケ瀬町のまちづくりは、「地域づくりネットワーク協議会」（全国・県のネットワークよりもまずは主として五ケ瀬町地域づくりネットワーク協議会）を中心に据え、各団体の活発な活動から更なる住民の参加を誘い、より住民自治を強化してゆく事が肝要だ。目指すものは、人それぞれ違うだろう。しかしそれは当然のことであり、悪いことでも間違ったことでもない。視点を多く持ち、工夫し、常に前に進む姿勢を忘れずに、住民それぞれが誇れる「五ケ瀬」を住民自身で確立していく。これがこれからの五ケ瀬のまちづくりだ。

（４）最後に

「五ケ瀬」は、非常に面白いまちだ。これまで、五ケ瀬のまちづくりについて延々と述べてきたが、まだまだ述べきらないところもたくさんある。視点を産業に変えれば、昔から営まれていた農業と林業、それに加えて現在地域を支える雲海酒造という企業の参入。さらにワイナリーの建設・完成、五ケ瀬の新しい特産品「五ケ瀬ワイン」の誕生。視点を文化に変えれば、夜神楽、国の重要文化財指定も受けている「荒踊り」。そして観光・レジャー、あるいは資本の視点から、樹齢 200 年を超える枝垂桜の美しさ、日本最南端スキー場五ケ瀬ハイランド。古いもの（社会資本・文化資本）を守っていくだけでなく、確実に新しいものも取り入れ、新たな伝統をつくっていく。こんな小さな、田舎町のどこに、そんなパワーがあるのだろうと感心せざるを得ない。しかし、福岡県に「ふくおか五ケ瀬町人会」という五ケ瀬ファンを 150 人もつくった五ケ瀬の魅力は、まだまだこんなものではないと思う。夜神楽自体が面白いのではない、寒い夜暖めあうように寄り集まって、夜を徹して舞い、舞をみながら友人たちと或いは初対面の人と酒を飲み煮しめをつまむのが面白いのではないか。あの独特の、昔懐かしい、心温まる雰囲気が魅力なのではないか。人々のやわらかい物言い、挨拶、ゆったりとした時間が流れる夕暮れ。私自身、五ケ瀬で六年間過ごすうちに、すっかり五ケ瀬ファンになってしまった。ふくおか五ケ瀬町人会会長の井村氏は、五ケ瀬に癒されに訪れるというが、その言葉に嘘偽りなど全くないだろう。夕日の里づくりのキャッチフレーズは、「おかえりなさい、心のふるさと」だが、本当に五ケ瀬に帰ると、ただいま、といいたくなるのである。

五ケ瀬は、やはり田舎である。若者は、一度は外に出たいと思うものが多いという。話を伺った 20 代後半から 30 代、40 代の方も、そう思っていた人や実際一度町からでた人が多かった。そんな方に、なぜ戻ってきたのかと問うと、「懐かしかった」「故郷に愛着があった」「子供はここで育てたかった」などの意見があった。ふと考えると、五ケ瀬の子供はみんな小さいころから、しぜんと郷土芸能や文化に触れながら育ってゆく。山川で遊んだことのない子はいないだろうし、自家製の味噌や豆腐を食べたことのない子供もいない。夜神楽や祭りなどのイベントは数少ない楽しみだろうし、地域には神楽クラブや太鼓クラブもありそこでの活動は祭りなどで大衆の前での発表の場が設けられる。周囲の人間も顔見知りで、（実際五ケ瀬では一人と知り合いになれたらその地域住民全員と知り合いになったようなものだ。何処何処の誰さんところの長男坊という言い方でほとんどの人は解る）これならば故郷に愛着が湧くのも当然ではないだろうか。「いつかは、帰ってきたい」と人々に思わせる五ケ瀬のまち。もしかしたら、そんな視点から新しいまちづくりがまたひとつ、生まれてくるかもしれない。

《参考 URL》

http://www.town.gokase.miyazaki.jp/

http://www.sanson.or.jp/mura/mura69/frame1.html
http://www.nishiusuki-gappei.jp/
http://www.forestopia.gr.jp/show/yuhi.htm
http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/jirei2001/79yuhi/7901.htm